

第 61 回国立大学図書館協会総会 研究集会
平成 25 年度国立大学図書館協会海外派遣事業(短期)報告 サマリー

北米図書館における RDA 実践に関する実態調査

東京外国語大学学術情報課目録係
村上遥

LC (米国議会図書館) が、2013 年 3 月 31 日にすべての新規書誌レコードを RDA で作成することを公表したことで、RDA をめぐる動きは大きな展開を迎えている。そこで、RDA の導入が図書館の現場にもたらす影響を調査するため、平成 25 年度国立大学図書館協会海外派遣事業(短期)を通じて、8/3 から 8/14 まで米国議会図書館、シカゴ大学図書館、コロンビア大学図書館の 3 機関を訪問した。

RDA 導入に際して LC では、2012 年 6 月から 2013 年 3 月にかけて研修を行った。研修は、LC スタッフと大学図書館のカタログラー計 3500 名が受講した。日本の NII 目録システム講習会(図書コース)と比較すると、約 10 倍の参加者に対して、10 時間以上長い時間をかけており RDA 導入が北米で大きな影響があったことがわかる。

RDA を用いた図書目録登録への影響はコピーカタログとオリジナルカタログで差があった。コピーカタログは RDA 新設項目を機械的に追加するだけだが、オリジナルカタログではオプションの選択が必要となるので判断が難しいケースがあるようだ。RDA 導入によるローカルシステムへの影響は、メタデータフォーマットが MARC21 のままなのであまり大きくない。図書以外の RDA 導入可否についてはアーカイブ資料のケースが挙げることができる。アーカイブ資料は責任性が明示されていないことが多いが、RDA では責任表示を必須としているため、結局 RDA の利用は断念した事例があった。

本調査で訪れた図書館ではスムーズに移行しており、解釈など細かな問題点はあるものの業務を阻害するような大きな問題点は見られなかった。これは、RDA 研修が効果的であった点、メタデータフォーマットが MARC21 のままである点大きい。ただし、BIBFRAME が導入された場合の影響については、今後も北米の動きに注目する必要がある。

RDA はデジタル環境下のメディアの多様化、メタデータ交換に対応すべく策定されたが現状では完全に対応しうるか疑問が残る。しかし(1)逐次改訂される点、(2)BIBFRAME が策定されつつある点、(3)リンクトデータに向けた統制語の整理が行われている点から、北米は目標の実現へ向けて、着実に歩みを進めているように思われる。

こうした未来へ向けて、北米をはじめとする国々が一步を踏み出したことをまずは評価し、私を含め日本のカタログラーも変化に向けて、前向きに取り組まなければならない。